

原子カムの構造分析から合意形成論へ(6)

湯川秀樹と安全神話

Analysis of the structure of *Genshiryoku-mura* toward a paradigm shift of consensus building (6)

- Hideki Yukawa and Safety Myth -

*澤田 哲生¹

¹東京工業大学・先導原子力研究所

原子力の「安全神話」の原型は厚生省によって仕込まれた。そのことを歴史資料から明らかにする。

キーワード：原子カムラ、湯川秀樹、安全神話、関西原子力、厚生省

1. 緒言

湯川秀樹は原子力委員は、いわゆる「関西原子力」の立地に尽力した。最初の候補地は宇治市であったが、万一の原子炉事故時の水源汚染問題が端緒となり、当時の厚生省から絶対的安全が確保されなければ立地は極めて難しいとの注文がついた。これが我が国の原子力研究開発史における安全神話の発祥である。

2. 方法

研究方法は、湯川史料および関連する文献などの分析と原子力関係者への聞き取り調査である。

3. 「安全神話」のプロトタイプ

昭和32年1月13日の毎日新聞に次のようなタイトルの記事が掲載された。**宇治の原子炉 厚生省が反対；「万一の場合最悪、再検討を申し入れ—もうイヤになった—そんなに学者不信なら、湯川博士談。**昭和31年、京都大学についた予算から、関西研究用原子炉(第3号原子炉)が立地に向けて動き出した。そして沢山の候補地から最適として残ったのが宇治と舞鶴であった。この2候補を京大と阪大の合同チームが精査して宇治に軍配が上がった。しかし、宇治は淀川の上流に位置し、大阪府一帯800万人(当時)の水源である。安全確保への配慮は湯川らが最も気にした点であり、「大水や地震などの突発事故が発生した場合でも決して宇治川を対策が立てられ経費の上からも実行可能なことが分かった。」と胸を張った。これに対して、厚生省楠本環境衛生部長の横やりが入った。「もし地震で炉がやられ、放射能の水が溢れ出しはしないのか、「肝心のウラン燃料の残りカスはどうするのか、果ては「実験室の中の汚れた空気の行方は?…。心配の種は尽きぬ」という。一方で、「大阪府でも絶対反対の立場をとっており、十二月には赤間大阪府知事から厚生省に陳述書が出され、また兵庫県でも反対の動きが起きている。」と記事は締めくくっている。厚生省は、十四日にも文部省、科学技術庁に再検討を申し入れ協議することになっており、それに対して湯川はこう言っている。「学者の結論がそんなに信用されぬなら私はやめたい。」

4. 霞が関が生んだ「絶対、安全神話のプロトタイプ

このようにして、「学者の結論」を信用しないという霞が関の構図の中から、「絶対、安全神話の原型」が発祥したのである。関西原子炉は、その後阿武山、交野、四条畷と丸5年を遍歴し熊野町に辿り着いた。

参考文献

[1] 門上登史夫「実録 関西原子炉物語—熊取に第三の火が灯るまで」(日本輿論社、昭和39年4月)

*Tetsuo Sawada¹

¹Tokyo Institute of Technology, Research Laboratory for Nuclear Reactors